

## メッセージアウトライン コリント人への手紙 第二8:16～9:5 「好意に満ちた贈り物」

[16-17] 「私があなたがたのことを思うのと同じ熱心を、テトスの心にも与えてくださった神に感謝します。彼は私の勧めを受け入れ、非常な熱意を持って、自分から進んであなたがたのところに行こうとしています」

今までのかかわりからテトスがコリント教会の人々に対して熱心になるのは自然のように思えるが、実はその熱心こそ神がパウロと同様、テトスにも与えられたものであった。パウロはこのようにすべての良い願いを人に起こしてくださる神を仰ぎ、感謝している。私たちも与えられている様々な恵みを思い、感謝する生き方が大切。

[18-19] 献金は細心の注意を持って公明正大に取り扱われなければならない。そこでパウロは「テトスといっしょに、ひとりの兄弟を送ります」と言う。この人は、福音の働きによって、すべての教会で賞賛されており、また諸教会からこの働きのために同伴するように任命を受けていた非常に評判の良い人物であった。また、このエルサレム教会への献金は単に経済的な意味だけではなく、主ご自身の栄光のためであり、それに携わる者の誠意を示すためのものであった。

[20-22] ここで気がつくことはパウロ自身は決して自分で献金の取り扱いをしていない。彼はコリント教会から愛と信頼を寄せられているテトスと諸教会からの任命を受けた人物とにゆだねている。彼はこの献金の取り扱いについては、だれからも非難されることがないように心がけているのである。その理由は、パウロが主の前ばかりではなく、人の前でも公明正大なことを示そうと考えていたからである。またパウロは22節で、もうひとりの兄弟を送ることをつけ加えている。それで、コリントに行く使者は合計3人となった。この3人に共通なことは、いずれもすぐれた信仰の人であり、教会の働きに熱心であり、コリント教会の兄弟姉妹たちに深い信頼を寄せていたことである。

[23-24] ことにテトスについて言えば、パウロの仲間であり、同労者であり、苦楽を共にしてきた福音の働き人である。他の2人は諸教会の使者でありキリストの栄光である。キリストの栄光とは彼らによる奉仕がキリストの栄光を現すという意味。パウロはこの3人の使者を送るにあたり、コリント人たちに、その愛とパウロが彼らを誇りとしている証拠を示してほしいと願う。コリント人たちがパウロが誇ったとおりの人々であるならば、大いに彼の面目はほどこされ、かつ他の教会の人々には喜びとなるからである。

[9:1] 「聖徒たちのためのこの奉仕については、いまさら、あなたがたに書き送る必要はないでしょう」

すでにコリント教会の人々は何をなすべきかをよく知っていたので、パウロはこのような書き方をしたのであろう。ここでは献金のことを「聖徒たちための奉仕」と表現されている。献金ばかりではなく、すべての主の働きは奉仕である。強いられ

とするのでもない。見返りを求めてするのでもない。すべて神の栄光のためにすすんで愛を持って行っていくものであり、また、そうできることも恵みなのである。[2]パウロはマケドニヤの諸教会に対してはコリントを初めアカヤ州の諸教会のことをほめて紹介した。そのことによってマケドニヤの諸教会は大いに奮起させられたのであった。

[3-5]パウロはコリント教会の兄弟姉妹たちを大いに信頼していた。そして、その信頼が裏切られないように願っている。そして、そのことが実際的には3人の使者たちを先にコリントへ行かせて用意させておくというかたちとなったのである。

「どうかこの献金を、惜しみながらするのではなく、好意に満ちた贈り物として用意しておいてください」ここでパウロは献金の精神を再確認している。献金は惜しみながらするのではなく、好意に満ちた贈り物として用意しておくことが大切であり、それは心のこもったものでなければならない。

私たちが持っているすべてのものは神から与えられているものである。その与えられているすべてのものの中から、もう一度神にお返しし捧げていくのが献金である。神はその献金を豊かにお用いになり、そしてそのことによって、私たちはさらに豊かな祝福が与えられるのである。献金ができることは恵みである。私たちもここで教えられているように、実行していくことが大切。